第 38 回　神奈川県障害福祉職員実践報告会
報告集

～新型コロナウィルスを乗り越えて、再スタート～

第 38 回神奈川県障害福祉職員実践報告会実行委員会　編

第38回　神奈川県障害福祉職員実践報告会実施要領

１　目　的

各障害福祉事業所で行われている日々の実践を報告することにより、障害福祉事業所職員における支援技術の向上を図り、もって障害福祉に寄与することを目的に開催する。

２　主　催

一般社団法人神奈川県知的障害施設団体連合会

３　日　時　及び　実施方法

◇第１分科会　生産活動・就労支援部会　神奈川県社会福祉センターにて対面開催

令和６年１月２４日（水）１３：３０～１７：００

◇第２分科会　地域支援部会

※今回は事例応募がなく中止いたします

◇第３分科会　障害者支援施設部会　ＺＯＯＭによるオンライン開催

令和６年２月２７日（火）１３：３０～１５：４０

◇第４分科会　支援スタッフ部会　　ＺＯＯＭによるオンライン開催

令和６年２月２９日（木）１３：３０～１６：１０

※児童発達支援部会・日中活動支援部会・相談支援部会は実施を見合わせます

４　会　場（対面開催）

神奈川県社会福祉センター　4階　403会議室

〈住　所〉横浜市神奈川区反町3-17-2　　〈電　話〉045-534-3791

東急東横線反町駅 徒歩1分・京浜急行本線神奈川駅 徒歩7分

(ZOOM開催)

お申し込み後に当日のZOOM参加URLをメールでお送りします

５　参加費用　無料

第１分科会　生産活動・就労支援部会　報告書
日　時　令和６年１月 24 日（水）13:30～17:00
場　所　神奈川県社会福祉センター403 会議室
参加者　31 名

司会者：植田　仁志氏
（社会福祉法人紅梅会　紅梅園）
座　長：福岡　新司氏
（一般社団法人　SOWET みんなの広場）
助言者：佐々木　雅子氏
（社会福祉法人すずらんの会　ワークショップ・SUN）

報告１「コロナ禍で見えてきた生産活動の変化と今後の課題」
発表者：社会福祉法人電気神奈川福祉センターわーくす大師　小川　卓氏

はじめに、小川氏から 2022 年度の実績や、これまでの工賃向上の取り組み、コロナによる生産活動の変化の話がありました。講師の小川氏の所属する、電気神奈川福祉センターは産業別労働組合電気連合神奈川地協が 1972 年に障害福祉活動を展開したと説明がありました。全国的にも労組が障害者福祉施設を立ち上げるのは珍しいことですが、組合員の一人に障害児（ダウン症）を持つ家族がいたことから、この福祉活動が始まり、20 周年を機に法人を設立したとの説明がありました。

平常時に様々な社会資源や公共福祉サービスを活用して生活を営む障がい者にとって、このコロナ過では障がいのない健常者よりもさらに大きな不安や困難、不便を強いられています。そんな中で、多くの福祉施設が様々な工夫やアイデアで、少しでも利用者の工賃アップや、就労支援移行をしており、わーくす大師も治具の開発や、施設外就労を増やすために多くの売り込みをしたと説明がありました。様々な努力により、就労支援事業の 2022 年度は就労後 6 カ月の定着率が 100％であったり、就労継続支援事業 B 型の平均工賃月額は 30,596 円とコロナ禍とは思えない高水準のものでした。

コロナ過で大口受注先から、受注量が激減したこともあったが、固定の作業に頼らず、新たな作業に挑戦する機会が増加したとのことでした。

受講者からは「どのように、これだけの定着率を実現したか？」など質問があり、どこの事業所も同様の悩みや課題があることが伺えました。

報告２「ワイン用ブドウ作りと稲作」
発表者：社会福祉法人光友会神奈川ワークショップ
清水　崇氏、中野　健士氏

発表者は、稲作については中野氏、ワイン作りについては清水氏のお二人から講義がありました。全体的に、資料というよりは、写真を中心として、様々な解説が行われました。

農福連携を行うことで、利用者の出来ることを増やしていく職員や法人の努力、また、農業未経験の中で事業を始め、農地賃貸契約など様々な困難を克服し、現在に至る話がありました。また、ワイン用ブドウ畑の栽培も、果樹園ならではの非常にデリケートな課題や、それらを工夫し解決したことで見えた、新たなる展開などお話しされていました。昨今では、農福連携や、魚福連携が推奨される中で、実際にその事業に携わる方々の実体験を聞ける大変有意義な講義となりました。参加者から「農福連携の良かったこと、大変だったことは？」、「ワインを作る際に発生する搾りかすなどのフードロス対策は？」など活気ある質問が出て大いに賑わいました。

研修会「就労支援の質と今後の就労支援について考える」
講師:社会福祉法人白銀会　理事長　長谷川　淺美氏

社会福祉法人白銀会の概要とこれまでの法人の沿革の説明がありました。白銀会の支援の基本的な部分は、どの法人も根幹は同じなのですが、人としての尊厳を尊重し守ることにあり、障がい者でも普通に暮らすことを大きな目的としていると説明がありました。実際に、白銀会では結婚生活している利用者夫婦、子育て中、同棲して入籍予定のカップルなど、利用者が当たり前の生活をしている説明がありました。利用者の QOL（クオリティ・オブ・ライフ）を上げていくことはとても重要な課題であり、それは私たち支援員の努力や情熱に比例していくと説明がありました。

また、白銀会では終の棲家となるケアホームを立ち上げ、障がい者に財産を持たせるという試みも行っているとの話がありました。

「出来ない」で終わらせるのではなく「どうしたら出来るのか」を考えていくことが、これからは必要とのはなしがありました。

会場から質問が飛び交い「障がい者の恋愛や性」に対しての質問や、グループホームの質問など様々な質問がありました。

【まとめ】

コロナ過での対面で行う分科会としては実に 4 年ぶりの実践報告会となりましたが、同じ目的や理念を持つ仲間同士、コミュニティを築きながら行う対面式の報告会は活気もあり、またこれまでの中でも非常に参加者の多い、にぎやかな会となりました。このコミュニティを活性化していくことで、今後の障がい者福祉の社会がさらにより良い方向に発展する大きな機会になると思います。

●第３分科会　障害者支援施設部会
●令和６年２月 27 日（火）13：30～15：30
●神奈川県社会福祉センター４階 403 会議室
●スタッフ
①部会長　開会の挨拶：赤司（七沢学園）　司会：長谷川（素心学院）　助言者：佐々木（航）
閉会の挨拶：秋岡（みずさわ）　記録：永井（津久井やまゆり園）
②実行委員会　末村（かたつむりの家）　藤野（白楊園）　長沢（松が丘園）
③連合会事務局　三河

－報告内容－

（１）「桜の風地域移行実践報告～『川崎市入所施設からの地域移行業務ガイドライン』を活用した取り組みについて」　石戸　広明 氏・伊藤　真美 氏（桜の風）

桜の風の施設概要と特徴を説明した後、地域移行の実践を報告。川崎市は令和３年３月に公表した「第５次ノーマライゼーションプラン」に更なる地域移行を推進する為、川崎市自立支援協議会に「入所施設からの地域移行部会」を設置、地域移行コーディネーターを盛り込んだ新規委託事業を立上げた。これを桜の風が受諾し、令和３年 10 月に地域移行コーディネーター２名を配置するなど、川崎市入所施設からの地域移行業務ガイドラインに基づき地域移行の実践に取り組む。

地域移行業務ガイドラインでは、地域生活の継続が困難になった場合、入所施設を利用した上で生活の再構築に取り組み、本人らしい暮らしのスタイルを丁寧な意思決定の中で模索し、地域での生活を回復していく過程として捉え、８つのフェーズに分けて地域移行を進めた。実際の活用事例として利用者（男性 35 歳）への実践と今後の展望について説明がある。

●助言者佐々木

地域移行業務ガイドラインについては、行政と施設等で連携を図り、入所時から退所時まで多機関で連携を図りながら取り組むなど、他の地域でも参考にして欲しいと感じた。この取り組みを通じて良かったことや課題があれば教えて欲しい。

●桜の風

良かったことは桜の風はもともと通過型をコンセプトにしており、利用者の地域移行に取り組んできた施設である。地域移行は施設だけで取り組んでも難しく、家族へのアプローチを含め施設だけで対応することに限界がある。そんな中、多機関で連携を図りながら皆で取り組めることがメリットである。課題については関係機関にこうして欲しいとか要望があっても、同じ方向性を合わせて行く難しさを感じることがあるが、利用者本人のためにという視点は一緒であり、とてもありが

たい。地域移行業務ガイドラインはネットからダウンロードできるのでぜひ一読願いたい。

（２）「数字で振り返る“元強行専用”棟」　岩本　雄次 氏（中井やまゆり園）

中井やまゆり園の泉寮（元強度行動障害専用棟）を中心に概要を説明、これまでの不適切な支援が行われた背景を中心に報告があった後、当事者目線の改革プログラム策定や当事者目線のアクションプラン策定など支援の改善に努めた経過について、身体拘束廃止への取り組みや受注作業への取り組み、園外活動への取り組みなど、数字で振り返りながらこれまでの実践について報告がある。

特に居室施錠ゼロを実現した結果、利用者は職員の心配を超えて応えてくれた。また、身体拘束廃止への取り組みでは、職員が新しいことに取り組むなどの好循環に繋がった。最後に発表者のつぶやきとして、虐待は「誰が悪いのか」ではなく、「何が悪いのか」を問いたい。との問いかけがある。

●助言者佐々木

虐待問題は中井やまゆり園だけの問題ではなく、施設全体の共通した課題として捉えた。中井やまゆり園は他の施設では対応の難しい障がいのある利用者を受け入れてきた施設である。施設には医療と福祉の観点があり、医療は命を守る、福祉は生きがいを提供する、などそれぞれに役割の違いがあるが、中井やまゆり園はこれまで医療の観点が強く、事故のない利用者の命を守る観点に寄りすぎていたのではないかと考える。これからも利用者の生きがいに寄り添っていく支援に取り組んでいただきたい。

（３）「津久井やまゆり園における当事者目線の支援『当事者活動支援の実践』について」
橋本　忠義 氏・鈴木　剛史 氏（津久井やまゆり園）

津久井やまゆり園では、利用者本人の望む暮らしを実現するため、意思決定支援を推進し、利用者の心の声に耳を傾け、本人の望みや願いをしっかりと理解しながら、ストレングスを活かした本人主体の個別支援を実践。当事者活動の支援として、利用者自治会「ピザの会」の会長選挙や各活動に対するサポートや、園の運営会議・行事の実行委員会へ利用者が参加することで、園の運営に利用者の意見を反映させ、園長との茶話会の開催や園にポニーが来園して乗馬体験を行うなど要望を具現化した。

また、利用者の地域参加を積極的に進めるため、相模湖地区社協さがみこ地区社協だよりの配布ボランティアへの参加や、津久井支援学校、千木良小学校との交流を通じて、利用者個人が地域との繋がりを深めることを実践した。

●助言者佐々木

自分が以前の事業所で働いていたとき、利用者さんに何かしたいことないか訪ねたところ、本人から「僕は牛を飼いたい」と話があったことを思い出した。生き物を飼育することは大変なことであり、その時は本人が自ら諦めてしまうような誘導をしてしまったが、今日の話を聞いて自分達で飼育するだけではなく、牛のいるところを定期的に訪ねたり実習したりするなど、あの時に違った対応ができたのではないかと悔やまれる。ピザの会を中心に利用者の意見を反映させ実現していくことで、利用者の発言や自信に繋がっていると感じた。また、日中活動の役割は社会生活支援である。社会との連携や経験など、そういった施設外の場所で活動することがとても大事なことだと感じた。他の施設でも参考になったと思う。最後にご本人に対する支援や地域との交流の中で、利用者の変化がどうだったのか教えて欲しい。

●津久井やまゆり園

園には利用者からのご意見箱を２ヶ所設置しているが、当初は苦情のような手紙を入れることが多く見られたが、利用者の小さな夢を実現するようになり、内容が要望など意思の表出に変化してきた。またそこから、どんどん楽しくなって話が広がり様々な活動に繋がっている。今後は園長と食事をしたいとの要望があるので、園長にも協力いただきながら近く実現したいと考えている。また、小動物を飼育したいとの要望もあるので、まずは金魚の飼育などから始めたい。

（４）「入所施設での食事支援のあり方について～その人の楽しみ方とは？～」

田作　俊祐 氏・若山　すみえ 氏（恵和青年寮）

恵和青年寮に入所されている利用者（男性 39 歳）に係る食事支援のあり方についての報告。入所時から現在までの経緯について、ご本人の食事に関する状況を中心に説明があり、入所後一年を経過したころから機能的な問題が発生し徐々に食事の摂取が困難になる中、ＶＥ検査を実施することで、咽頭への侵入、唾液や残渣で溺れているような状態が確認され、誤嚥をしているとの評価を受ける。その後、食事提供に関するマニュアルが多数作成され、新たな食事支援を開始したことで、食事を徐々に食べることができるようになり、安定して食べることができるようになった。

ご本人の QOL に目が向けらるようになり、利用者に対して生活支援員と管理栄養士が中心に、歯科医師など様々な専門職が関わりながら、入所する利用者に合わせた食事支援を実践したことで、改善に繋がった。４年間の支援の結果、余暇外出で外食を楽しむまでに

回復された。食事は暮らしの土台になる。

●助言者佐々木

私の施設でも嚥下障害、機能低下により医療処置をした利用者がいる。水分やお薬など、胃ろうでの摂取になった方でも、ご本人が好きな食べ物だと誤嚥せず上手に食べられることが多い。施設では体重が減る方が多いが、運動とか生活の活動範囲が少なくなったことで運動不足になり、お腹がすかないことも一つの要因となり得る。今回の発表は支援一年目の真っ新な職員の意見を、組織の中でしっかりと受け止め、大切にされていると感じた。

発表者と各部会長

第４分科会(支援スタッフ部会)　報告
日　時：令和６年２月 29 日(木)13:30～16:00
会　場：神奈川県社会福祉センター403 会議室
座　長：原祐介氏（パセオやがみ）
司会者：能條尚樹氏（七沢学園）
助言者：武居光氏（青丘社 地域相談支援センターさらん）

報告①「言葉にできない～拒否もたいせつな意思表出」
報告者：向坂大央氏・小池真一氏・西本智輝氏（三浦しらとり園）

歩くことについての拒否が日を追うごとに強くなった利用者さんへの支援についての報告でした。歩行を嫌がる時の状況を整理・考察し、支援方法の再構築を行った様子について分かりやすく紹介して頂きました。「拒否などの行動には理由がある」との視点で丁寧に支援されている様子がうかがえました。支援後の振り返りとして「本人がどうしたいか、何を望むかを一緒に考える」とのお話しがありましたが、我々支援者が忘れてはならない大切なことだと感じました。

報告②「7 寮の施錠開放の取り組み」
報告者：木村創氏・青木太一氏（三浦しらとり園）
開錠の取り組みに向けた支援についての発表でした。7 寮では元々視覚的支援・構造化を行っており、それらの支援を発展させて取り組んでいる様子を多くの写真を用いて紹介して頂きました。支援者側の開錠についての考え方(開錠する事のリスク・鍵を開けることの意味など)の整理を行ったこと、また各利用者さんについてバックキャスティング思考を用い、今すべき支援を明確化することで、利用者さんのより豊かな生活に繋がるよう支援を行っているとのことで、他の施設でも参考になると思われる事例発表でした。

報告③「知的障害者の高齢化に伴う退行現象の指標について」
報告者：吉澤宏次氏（ほうあん第二しおん）

知的障害者の場合、一般の高齢者に比べて身体機能の低下が 10 年程早く、老化の兆候が顕著になる。40～50 歳代に急に加速し周囲が気付いた時には対応が遅れてしまっているという現状があり、生活支援員が客観的に見て数値化することで退行現象にいち早く気付き支援内容に反映できないかという思いからプロジェクトチームを立ち上げ、指標づくりをおこなったとのことでした。模範となる前例が無く全て手探りで作成されたとのことで、とても大変な作業だったと思います。

今回の指標についてはたたき台とのことでしたので、今後更に磨きがかかっていくのだと思います。様々な支援現場で指標が活用され、高齢者への適切な支援に繋げていけると良いと感じました。

報告④「コロナ禍を経て利用者の骨密度はどう変化したか」
報告者：風間茂生氏・上谷道子氏（くず葉学園）
コロナ禍を経て日々支援している利用者さんの様子に身体が重そう、動き辛そうと感じることがあり、科学的な方法で変化を確認したいという思いからコロナ前とコロナ後の骨密度の変化を分析したとのことでした。くず葉学園では 30 年以上前から「体育の時間」を設け利用者の運動機能の向上を図るため運動する機会を大切にしてきたとのことでコロナ禍においてもラジオ体操や散歩、廊下歩行などできる限り運動する機会を作ったとのことでした。結果として骨密度の低下が見られ残念だったとのことでしたが、コロナ禍で様々な混乱や制限がある中で利用者の健康のためにできる限りのことをするという姿勢にとても感動しました。

報告⑤「医療重度の方への支援」
報告者：鈴木奈実氏・宮岡和叶氏・樽川舞衣氏（七沢学園）
七沢学園では平成 15 年度より民間施設では受け入れが困難な難治性てんかんや内科系重度医療管理等を併せ持つ方の受け入れを始め、現在は 3 名の医療重度利用者が生活をされているとのことでした。医療重度利用者の生活支援においてはどうしても生命維持が優先され生活の質の向上に目が向かなくなってしまうことが課題であるとのことでした。

そのような課題がある中で医療と連携しながらご本人の好きな物や好きなことに着目し日々の生活の中で楽しみを提供出来るよう余暇活動や行事に参加しているとのことでした。医療と福祉の連携によって利用者一人ひとりの楽しみに寄り添った支援を実現されておりとても感動しました。

全体をとおして
　今年度の実践報告会は新型コロナ感染症の影響により、4 年振りの開催となりました。発表者には県社会福祉センターにお集まりいただき、発表は Zoom で配信を行うハイブリッドの形式で実施しました。今回 5 例の事例報告があり、どの報告内容も新たな知見を広げる有意義な内容で、各施設においても参考になるものだと思います。日々の業務でお忙しい中、また発表までの準備期間に余裕があるとはいえない状況にもかかわらず素晴らしい報告を行って頂き、ありがとうございました。

〈文責〉
　報告①②「全体をとおして」：鶴岡秀樹（津久井やまゆり園）
　報告③～⑤：樋口大剛（光風会工房ごんた村）

第 38 回　神奈川県障害福祉職員実践報告会　実行委員会

佐藤　大輔（光海学園）
坂本　耕一（くるみ学園児童）
小林　佳子（川崎市中央療育センター）
山田　努（相模はやぶさ学園）
森下　浩明（ゆう）
高橋　啓太（ホルツハウゼ）
小野寺　久（南身館）
山崎　顕（パステルファームワーキングセンター）
清田　聡（竹の子ケアセンター）
高桑　厚史（偕恵いわまワークスグループホーム）
中島　博幸（グループホーム宮前こばとの家）
河内　一茂（慈仁舎）
能條　尚樹（七沢学園）
樋口　大剛（工房ごんた村）
原　祐介（パセオやがみ）
鶴岡　秀樹（津久井やまゆり園）

長谷川　洋之（素心学院）
佐々木　画生（航）
秋岡　正充（みずさわ）
永井　清光（津久井やまゆり園）
福岡　新司（みんなの広場）
西村　潤（第二空とぶくじら社）
小川　卓（わーくす大師）
佐々木　雅子（ワークショップ SUN）
小川　陽（貴志園）
添田　好男（あおば地域活動ホームすてっぷ）
中山　良介（いまい地域相談支援センター）
玉井　美紀（銀河）

＊実行委員長＊
末村　光介（かたつむりの家）
＊副実行委員長＊
根橋　達治（希望）
藤野　真一（白楊園）
長沢　伸孝（相模原市社会福祉事業団松ヶ丘園）

出縄　守英（進和学園）
三河　由佳（県知的障害施設団体連合会）

第 38 回　神奈川県障害福祉職員実践報告会　報告集

【発行日】令和 6 年 3 月吉日
【発　行】一般社団法人神奈川県知的障害施設団体連合会
会長　出縄　守英